ヤオコー会長

川野 幸夫氏 ⑰

～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者

お金の使い方こそ生き方

息子悼み小児医療を支援

私は1982年の秋に、当時小学校2年生だった長男の正登（まさのり）をウイルス性脳炎という病気で亡くしました。8歳になったばかりです。今もって信じられないほど、あっという間の出来事でした。それまでの私は、仕事、つまりヤオコーのことしか頭にありませんでしたから家族との生活の場は相当おろそかになっていたと思います。

正登が亡くなって「あの子はお父さんを求めていた」と妻から聞かされ、がくぜんとしました。親としてあの子に何もしてやれなかったことを心から悔やみました。その頃には弟はもちろん、社員の皆さんもどんどん力を付けて来ていましたから、仕事を任せられる状況になっていました。私がその気になれば息子に付き合う時間は取れたはずです。後悔は先に立ちません。正登には本当に申し訳ないことをしてしまったと、心でわびる毎日であったように思います。

やがて月日がたつにしたがい、正登の霊を慰めるためにも正登のような不幸な子供を少なくするための活動をすることが、私に与えられた責務だと思うようになりました。私に何ができるか必死に考えていたちょうどその頃、ヤオコーの株式が公開されました。ご承知の通り、私は大株主の1人でしたから、株式を寄付して小児医学の発展に役立つ財団を作ろうと決めました。正登の死、そしてヤオコーの株式公開という2つの出来事があって、公益財団法人の川野小児医学奨学財団が設立されました。

この財団の事業は、日本における小児医療の研究助成と医学生に対する奨学金の支給が主なものですが、優れた小児医療研究を表彰する「川野正登記念、小児医学川野賞」の授与、それぞれの小児医学会への助成、さらに小児医療施設への支援を行っています。今年でちょうど設立30周年を迎えますが、時の経過とともに、財団の活動は日本の小児医学会で大変高い評価をいただくようになっています。うれしい限りです。正登にも少しおわびができているかなと思っています。

小児医学振興の役割はますます高まっている（2018年度の川野小児医学奨学財団の贈呈式）

そして、その活動資金の大きな部分はヤオコーの配当金です。昨年度は1億円を超えました。このようにこの財団の活動はヤオコーの発展に支えられています。まさにヤオコーの皆さんの頑張りのおかげです。皆さんにはこのことでも心から感謝しています。

ご承知のように、日本の国家財政は大変厳しい状況にあります。世界一の借金国である上に、医療や介護など高齢化社会であるがゆえの出費も年々増えますから、ほかの多くの費目は予算を削られています。先日も小児医学の権威といわれる先生方と話している際、日本では医学の分野でも科研費と呼ばれる政府からの研究助成のお金はどんどん少なくなっているとのことです。

これでは将来に向けての腰の据わった研究はなかなかできません。特に実績のない若い研究者は助成金をいただけないそうです。私は、川野財団の役割がますます大きくなってきていると感じています。ヤオコーが増益を続けながら着実に発展し、配当を増やしていくことは、日本の小児医学の発展にも貢献するのです。

少々生意気なことを言うようですが、私は「お金は稼ぎ方より使い方」が大切だと思っています。使い方にこそ、その人の生き方が出てきます。企業経営と同じく、世の中のお役に立つ使い方をして、自分の人生を充実させたいと願っています。その意味でも私は川野財団を設立してよかったと思っています。

日経MJ 2019年6月12日掲載

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。